富士川游の世界

医学史、医療倫理、そして宗教

田畑 正久
桑原 正彦
富士川 義之
松田 正典
佐々木 秀美
栗田 正弘
土屋 久

一燈を提げて
暗夜を行く暗
夜を憂ふる勿
れ只一燈を頼
れ
佐藤一齋先生語
富士川游録之

富士川游の揮毫書（広島県医師会提供）

富士川游（慶應義塾大学図書館提供）

安佐医師会　医の倫理のすすめ

「医箴」（いしん）　富士川　游

- 第一　医師ならば人を選ばず慈しみ全ての人の苦を救うのみ
- 第二　医師たるは内に真心外に威儀欲は無くして頭（こうべ）も低し
- 第三　診察は慎重にして雑ならず細密なるも決断要す
- 第四　治療には細かきことも気を配り知るを施し悔いの無きよう
- 第五　痛みをば倦まず弛（たゆ）まず和らげよ不治の者への医師の優しさ
- 第六　病む者が死を疑えば医師頼る言葉はっきり態度ゆったり
- 第七　病む者を仁医能く容れ能く忍ぶ手厚くせんと励み努めよ
- 第八　病む者の性格家庭大事なり人と事とをとくと観るべし
- 第九　処方箋誤り書けば害多し劇薬ならば殊に用心
- 第十　治療法他医をむやみに批評せずその医の良きを説いて諭（さと）せ
- 第十一　名声を求むるよりは信頼ぞ名を得んとして信失うな
- 第十二　医師はただ黙（もだ）して信に背くなよ秘密辱じをば聞き及ぶとも
- 第十三　医師同士敬い合うが一番ぞ互いに睦み周りも和む
- 第十四　腕揮い専（もは）ら安全図る時疑う嫌う共に有る無し
- 第十五　問題に人を率いてひるまぬは私利を図らぬ善良な医師

（医箴歌　狩野　充徳　作）

富士川游「医箴十五カ条」現代語訳
※安佐医師会公用封筒に印刷されている

まえがき

このたび、広島市安佐地区に生まれ、日本の医療界に大きな貢献をされた、富士川游先生の顕彰の出版の取り組みがなされましたことに、深い敬意を表します。

富士川游先生は広島にとどまらず、広く日本の医療界へのメッセージを残されています。西洋医学の導入期より、医学・医療の、科学的思考の医学知識、医学技術だけではなく、病人の全体を考える対応の大切さを一貫して主張されました。「医学という学問が進み、技術がいかに進んでも、医道が確立されていなければ、十分ということはできない」と発言され、医師は病気にだけ着目するのではなく、病人を救う人格性を持つことの大切さを指向されたことは特記すべきことで、現在の医療界も耳を傾けるに値することと考えます。

富士川先生は仏教、特に浄土真宗に造詣が深く、ドイツ留学中には当時の西欧の哲学・宗教に触れて、改めて先生自身が小さいころからご縁のあった親鸞聖人の教え、庶民に浸透した浄土真宗の無条件の救い、老病死の臨床現場で生きてはたらく仏教を評価して、社会へ、そして医療界に発言し行動を起こされています。

生老病死の四苦は、医療の課題であると同時に仏教の課題でもあったのです。しかし病気との闘いにおいて、西洋医学の目を見張るような進歩とともに、仏教的な面が軽んじられたことは、時代性のなかで避けられなかったのでしょう。富士川先生の「医療と仏教の協働」の願いは、当時の時代・社会性の中ではなかなか注目されなかったようです。

西洋医学導入から百数年が経過し、その間、先輩方のご苦労によって、日本は世界に誇る長生きを享受できるようになりました。長寿は実現できましたが、現在では長寿の質、生命・生活の質が問われています。長寿社会を迎えて、改めて老病死をマイナス要因とだけ見るのではなく、老病死の受容の文化、「人間として生まれてよかった。生きてきてよかった」と言える仏教文化に医療界も関心を持って、本当に「病む人の心を大切に」が実現できる医療現場が願われることであります。

個人的なことになりますが、私の父、横倉弘吉は学生時代から九州大学仏教青年会に属しておりました。終戦後、父は家族の疎開先であった高田町（現・福岡県みやま市高田町）住民の強い要請に応じて診療所を開設しました。開業当時は三年間の約束であったのですが、地域のニーズに応える中で七十数年が経過し、今日の社会医療法人弘恵会へと発展して、私たちに引き継がれています。

父は仏前で毎晩「正信偈」をあげる生活をし、恩師入江英雄先生（元九州大学総長）よりいただいた「病む人の心を大切に」の言葉のような、全人的医療を行う人生を全うして、九十六歳で往生浄土しました。

日本医師会も二〇一七（平成二十九）年に、第XV次 生命倫理懇談会 答申「超高齢社会と終末期医療」の中で、宗教的ケアや臨床宗教師との関わりの方向性の大事さを発表し、全人的医療を推進してきました。

このたびの富士川游先生顕彰の広島県医師会の取り組みによって、日本の医療界が、病気だけを救うのではなく病人の救いを考えることの大切さ、そして医療と仏教（宗教）の取り組みの大切さに気付いていくきっかけになることを期待して、一文をしたためさせていただきました。

二〇二一（令和三）年四月一日

日本医師会名誉会長（第十九代日本医師会会長・二〇一二～二〇二〇）
社会医療法人 弘恵会 ヨコクラ病院 理事長 **横倉 義武**

富士川游の世界――目次

まえがき ……日本医師会名誉会長　横倉　義武……1

現在において富士川游を顕彰する意義　田畑　正久

一、顕彰の意義 ……10
二、医療と仏教 ……12
三、仏教は役割を終えたのか ……14
四、仏教は宝物の蔵である ……17
五、経は鏡なり、私の相（すがた）を照らし出す鏡 ……24
六、多くの医療者は仏教のご縁がないまま…… ……28
七、これをご縁に仏教に触れてほしい ……29
八、人間を見る視点 ……31
九、人間を丸ごと救う仏教 ……32

富士川游の世界　桑原　正彦

一、生い立ちから上京へ ……36
二、東京での活動と古医書の収集 ……39
三、ドイツ留学と日本醫学史 ……42
四、富士川流医療倫理と近代医療への警告 ……47
五、富士川游構想の実現に向けて ……55
六、富士川游の宗教の心とは ……58

祖父・富士川游のこと　富士川義之……69

富士川游の宗教的背景を尋ねて　松田　正典

一、富士川游との出遇い ……96
二、富士川留学の頃のドイツ ……100
三、富士川の「新一元論」について ……105
四、著書『仏教の神髄』と『新選妙好人伝』を拝読して ……118
五、富士川の郷里の「安芸門徒の伝統」 ……124

富士川游と医学・医療観　田畑　正久

一、仏から賜る信心 ……130
二、医療と仏教の協力 ……140
三、老病死の受容 ……142
四、富士川の医療者への願い ……149

仏教精神と看護 ―富士川游の思想探求を通して―　佐々木秀美

一、宗教と科学、そして医術に関する富士川游の見解 ……158

二、富士川が提唱する看護療法 …… 163
三、仏教と看護 …… 174
四、おわりに …… 182

実地医家の宗教的診察 ―現代医療の現場から― 栗田 正弘
一、いのちへの問い …… 187
二、仏教の大切さへの気づき …… 190
三、患者さんとの交流 …… 198
四、念仏に生きた方 …… 203
五、医療と仏教 …… 212

略年表と主な宗教関連著作 土屋 久
一、略年表 …… 216
二、富士川游の宗教活動―正信協会と『法爾』 …… 218
三、主な宗教関連著作目録（一部医療関連を含） …… 220

あとがき …… 228

＊本文中『浄土真宗聖典（註釈版）第二版』（本願寺出版社）は『註釈版聖典』と略記しています。

現在において 富士川游を顕彰する意義

田畑 正久

田畑 正久（たばた まさひさ）
医師。佐藤第二病院院長、龍谷大学客員教授、「西本願寺 医師の会」発起人、大分県宇佐市円徳寺門徒総代。
国立中津病院外科医長、東国東国保総合病院院長、龍谷大学教授などを歴任。
2015年、ビハーラ医療団（代表：内田桂太、田代俊孝、田畑正久）の活動により、公益財団法人仏教伝道協会「第49回仏教伝道文化賞　沼田奨励賞」を受賞。
【著書】『医療文化と仏教文化』『医者が仏教に出遇ったら』（本願寺出版社）、『病に悩むあなたへ』（東本願寺出版）他。

一、顕彰の意義

九州で医療の仕事をしてきた私が富士川游先生（以降、敬称を略します）を知るようになったのは、広島大学名誉教授の松田正典先生とのご縁です。医学部五年生の時、九州大学仏教青年会の総務担当者として、活動に方向性を見出せないで悶々としていた時に、広島大学出身の細川巌先生（一九一九～一九九六、当時は福岡教育大学教授、化学）に巡り会い、ご指導をいただくようになりました。仏教の学び（聞法）を数年した頃、細川先生より松田先生を紹介していただきました。富士川と私の共通点は、浄土真宗と医学・医療という背景をもってのご縁であります。さらに、松田先生より桑原正彦先生を紹介していただき、富士川顕彰の企画に参加させていただくことになりました。

今回、広島県安佐医師会が富士川游を顕彰されることの大きな意義は、先生が浄土真宗の土徳の地である広島で、大乗仏教の至極としての浄土真宗、すなわち念仏の教えを身につけられ、西洋文化に直接に触れたうえで、「宗教と医療の協働」という課題に先見の明をもって、医学・医療界に情報発信をして働きかけられたことにあると思われます。

明治時代、ドイツ医学を取り入れて日本の医学・医療を創設する時代、富士川は廣島縣病院附属醫学校（現・広島大学医学部）を卒業、上京します。その後、ドイツに留学し医学の研鑽を積むと同時に、哲学・宗教にも関心を持ち、西洋文化の基礎を学んでいます。帰国後は、日本の医学界の黎明期に大きな貢献をされました。

医学と仏教は「生老病死の四苦」の解決を共通の課題としています。しかし残念ながら、日本では両者の協力の文化が育たないまま現在に至っています。今こそ両者の協力関係、協働の文化が求められていると思うのです。富士川は、「安芸門徒」として念仏の教え、浄土真宗こそ医学と協力して全ての人に寄り添う教

えであるとの確信を持ち、老病死を受容して人間を丸ごと救う念仏の教えを勧められたのです。その心をもって、臨床の現場では、「病気を診るのではなく、病人を診ましょう」と言われたと思うのです。人間を無条件に救う浄土の道を感得された人の、自然なる心からの願いであったと思われます。

高齢社会を迎えた現在の日本（そして世界）の医療現場において、富士川は西洋医学を受け入れる黎明期に、全ての人（患者、家族、そして医療者）の救いを実現する浄土の教えを先見の明をもって願い、発言したと思われます。

二、医療と仏教

日本人の多くは、医療と仏教が同じ「生老病死」の四苦を課題としていることに目を向けていません。

私は細川巌先生との出会いまで、常識的な科学的合理思考で考え生活していま

した。その後、浄土真宗を学び、そのお育てによって自然と念仏の道を歩んでいます。卒業後は外科に進み、同時に継続した仏教の学びをしました。それらの経験から、科学的思考の医学と仏教の立場の両方の視点をいただいています。

三十歳頃、仏教関係の本を読んでいましたら、埼玉医科大学哲学教授の秋月龍珉先生（一九二一～一九九九、禅宗・師家）が、医学部の学生に「皆さん方は人間の〝生老病死〟の四苦を扱う医療の仕事に将来携わるのでしょう。仏教は同じ〝生老病死〟の四苦に取り組み、解決の道を見出して二千数百年の歴史があるのです。同じ課題に取り組んでいくわけですから、医療の仕事に携わる者は是非とも仏教的素養をもってほしい」と語りかけていた、との記述を読んで少し驚きました。世間の「常識」では「生きているうちは医療、死んでから仏教」という偏見が多い中で非常に勇気づけられました。

「第二十三回 日本医学会総会」（一九九一年、京都）での開会講演で、福永光司先生（一九一八～二〇〇一、京都大学名誉教授）も秋月師と同じような指摘をされてい